
切り替わる一日に

笠置 有

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

切り替わる一日に

【Nコード】

N2912E

【作者名】

笠置 有

【あらすじ】

いつもどおりの一日が非現実に切り替わる。普段の様に学校へ行ったら妙な3人と出会いました。でも学校はたくさん人間が集う場所。そこには彼らしか居ませんでしたよ、というところから始まります。生きるためだというけれど、それが最良かなんて知らないよ。といった感じ。（練習小説。短い区切りで進めていきます。30話程度の中篇予定）

聞こえない声

繰り返されるだけのように見えて、実はそうじゃない。
生きていくために必要な術を知る。なんて建前がまかり通る箱庭に
押し込まれているから、時間なんて無意味に思えるだけだ。

梅雨を少し過ぎたこの頃はずっと暑い日が続いていたのに、昨晚の
雨に地表の熱が奪われたのか、妙に涼しくて衣替え前の中間服じゃ、
肌寒い。それだけがいつもと違うような気がする。何にも変わり映
えない朝だった。

揃いの制服を着込んだ同世代のための箱庭。そこに流れる時間は妙
に息苦しくて苦手だ。そこに流れる空気もだらだらと無意味に濁る
だけできつと将来の役になんてたちやしない。でもこの自分の考え

が一般的じゃない事は重々理解していたから一度もそれを口に出したことはない。普通、に従うふりだけをしている。

おはよう、って挨拶する。これも昨日と同じ。

玄関から入ってずらりと並ぶボロッちい靴箱に外履きを詰め込んで、上履きを履いて昨日も歩いた廊下をたどる。これも同じ。2－3つて書かれたプレートしか目印がない教室の扉を開いて喧騒飛び交う教室に入る。それで、席についてから耳に引っかけたイヤホンを外す。

ぴたりと止んだ音に変わって耳に入ってくる雑音は、箱飼いモルモットな生徒諸君の馬鹿騒ぎ。だと、思っていた。静寂と無色が占める世界が目の前にあったとしても、自分は何一つ関心を持つとうとしていなかったんだ。

「え．．．．．どうして．．．」

そして、それに返る声もない。

探してる

鼻につく匂い。つんとする鉄くさい匂い。

なんだろうか何かがおかしいんだ。そう、それは始めからそうだった。今日という日の、始めからだ。

たとえばロッカーに入れずに脱ぎ散らかしてある靴とか。ロビーの円形の長いすに置かれたままの通学かばんや部活用の大きいかばん。確かにここはいつもの通いなれた学校だなと確信できる見飽きた光景、だったはず。何がおかしい？ なにもおかしくない、はず。

そこにあるはずのものが欠けていても、興味がなかった。

「おはようって・・・言った」

そう、玄関で彼女に。・・・彼女って誰だっけ。

興味ない。どうでもいい。だから顔なんて見なかった。

俯かせることに慣れた顔を、上げてみた。人一人いない教室。静まり返る、教室。廊下からだって物音一つしないのに。

特大の電子音が鳴る。そうだと認識できたのは耳になじんだ音だったからだ。始業のチャイムにびくりと体を揺らしてからもう一度視

線をめぐらす。

とりあえず現状を確かめるしかないだろう。

毎朝真っ先に向かう自販機の前。ヴーという重低音を響かせながら機械は動いている。

靴底のゴムが床と擦れ合う音だけが校舎に響くさまはやはりおかしい。

並べられている商品も変わらず。今飲み物を買おうとはさすがに思わない。

2階の教室へと続く階段に足を向けてゆつくりと踏みしめ登る。

踊り場にさしかかろうかというところで足元から ペシヤリ という音が聞こえた。

反射的に眼を向ければ真っ赤な黒味を帯びた液体がそこらじゅうに広がっていた。

異常さを漂わせるこの状況に、なぜか妙に落ち着いている自分が何よりも異質に思えた。

わかってる

ぬるりとした感覚が足元から伝わってくる。これでは、滑って困るのでは。なんて考えてしまう。

上の階から流れ落ちてくる血・・・というのはなんというか、かなりホラーな光景だ。

これがゲームならば自分は間違いなく突然の不運に巻き込まれた主人公ポジションだろう。

眉をひそめながら止めた歩みを進める。びしゃり、びしゃりという自分の足音がなんとも言えず不快だ。視界に広がった光景は想像にたがわず真っ赤な海。ベージュ色の床が散らばった赤に覆われて隙間から覗いている。首を左右に動かしあたりを確かめる。

これだけの血液があふれているのだ。その元はどうなっているのか。想像は難しくない。

意識せずとも前に進もうとする足に従い自分の所属する教室の前までたどり着けば、周囲に散らばる肉片にだって気が付いてしまう。さすがにこれは気持ち悪い。

ゆっくりとしゃがみこんで観察してみるが明らかに表面は肌色で裏はぼこぼことした肉塊。

人、か。

瞳を閉じて今までの光景を思い浮かべる。ただ不思議だった。

「なんで・・・」

どうしてこんなことになっているのか。いったい何が起こったというのか。

頭を覆うようにしてくしゃりと髪を両手で掻き耷る。

「・・・・・・・・嘘」

理解できていない。頭がついてこれていない　なのに

怖くない。

周囲は血の海なのに？ 人一人居ないのに？ 音すらしないのに？

両手を顔の前まで持ち上げて、かざす。

怖くないのだ。気分は多少悪いが、混乱もしていない。

まるで、感情をなくしたように。押さえ込まれているように。

この状況を不自然だとは思えない、なんて

「うう・・・・・・・・」

両腕で自分の体を強く抱きしめる。

自分が、自分で無いような感覚。

誰かにこれを教えられていた

ような気さえる。

「自分」が奪い取られたような虚無感だけが、妙に恐ろしい。

声を持たないものですから

蹲っていても誰も助けてはくれない。手を差し伸べてくれる人は居ない。

不確定な もしも に縋ればきつと、もう立ち上がれなくなる。

自分の感情は捨て置いておく。胸騒ぎだけが広がっていく。どうしてか、これを収めなくては、という使命感のようなものがあるのだ。

異質な音が耳に届く。方向は誰の声もしなかったはずの教室から。確かに音が聞こえた。

・・・人の声？

自然と息をつめてしまう。耳に意識を集中して扉に眼を向ける。

この状況で誰かが居るとするのは良いことなのか悪いことなのか判断がつかない。

途切れ途切れに聞こえる音を拾う。

「こんな・・・なら・・・もういない・・・で」

「だと・・・今は」

やはり、人の声だ。はっきりとは聞こえないが、暴れ狂うゾンビの雄たけび ということとはなさそうだ。

内容は・・・前者はこうだろうか。こんな状況なら人はもう居ないのでは？と。最後に跳ね上げるような語尾がかすかに聞こえたからおそらく内容的に遠くは無いはず。

後者は・・・自分だったらなんと言おうだろう。

「だと・・・したら？」だろうか。続く語が「今は」ならば

「だとしたら今は」といった感じかもしれない。やはりこの状況に混乱しているのだろうか。なんて考える。私だって人を心配できる立場にないというのに。

しかし、どうも彼ら（？）はこの状況を積極的に望んでいる様子ではない。

だとしたら危険は少ないのだろうか。声の音程からして性別は男であろう。

だけでも　もしかしたらあの、殺人者的なニュアンスで「ここまでやればいいんじゃないか」みたいな意味かもしれない・・・。ここまで破壊しちゃえばもういいんじゃない？みたいな。

そうならば余計に自分の生命の保証は出来ない1級危険人物ということになる。

悶々と思ってくれるがだんだん面倒になってくる。小さく息を吐き出し、思う。

(・・・こんな場所に居て安全も何も無いだろうに。)

第一に自分はゲームの主人公のように、小説のヒーローのようにモンスターから逃げ切るだけの、バットを握り締めて立ち向かうだけの根性を備えてないのだ。むしろあんなのに追い掛け回されて人類の最後になるぐらいなら、都合のいいところでゾンビの仲間になる。

考えもまとまったところで腰を浮かし立ち上がる。そう、しようと思っただが。

中腰となり腰を浮かせたところで、この階全体に響き渡るような怒声が響き渡った。急に飛び込んできた大声に動きを一時停止する。なんだ、一体。

ばん！と何かを叩くような音に続いて今までの2人とは違った声が響く。

「うっとおしい！ぐずぐず言っていないでさっさと異形なり適合者なりみつけねえといつまで気色悪い所にいるつもりなんだよ！あんたらにはここが居心地よく感じるわけ？あつたまおかしいんじゃない！！僕はそんな素晴らしい感覚は持ち合わせていないんだよ！」

どこか幼い調子の声がいかに苛立ちを爆発させました、と自己主張しているようだ。

高めのアルトだったが、これもおそらく男性・少年？のような雰囲気である。

どうしたものかな。ああもう本当に何なんだ。私が何したって言うんだ。この状況をどうしろというのだ。

一息に文句を並べる。もちろん声には出さずに、だが。

この状況で誰か何とかして！とも言わない自分が気味悪いなあ、ととりあえず自分を蔑んでみただけ。

だから

しかしなんとも皮肉っぽい言い方だ。

内容は的を得ているように感じるが、自分の鬱憤を爆発させたというようにも聞こえる。

扉の真横、ぎりぎり汚れておらず本来の色を保っている壁に背中で寄りかかる。

先ほどの怒声を頭の中で繰り返して、考える。

やっぱり危険ではないかもしれない。自分に対してどういう反応に出るかは賭けだが。

何か探し物があるようだ。「適合者」とか「異形」とか耳馴染みの無い言葉が聞こえたがそれが目的でこの場に居るといった感じだった。

小さく笑みが漏れる。この状況で笑えることがかなりおかしいことだと言う自分も頭の中に居る。しかし少しだけ安心したのだ。

この状況でいかにも人間らしい言葉を、強い感情に乗せた言葉で聞けたことに。

扉に足をかける。お行儀が悪いが、正面きって入るのは気が引けたので足で横開きの扉を勢いよく蹴る。

ガラガラ ドン！

・・・すごい音。静かな空間だから余計に。

パン という音を聞いた気がした。

一瞬で空気が緊張したのだ。肌で感じ取れるぐらいに重くピリピリとした雰囲気。

するりと教室内に体を滑り込ませ、ふと視界にそれを捉える。

廊下よりも確実に竄っている湿気が匂いをさらに助長している。生臭さが酷い。

床には明らかに原型を保ったままの「血が流れていた生物」のパーツが散らばっている。

壁にも、床にも、机にも、椅子にも。

ああ、酷い。

そして・・・

「あんた、何」

警戒心をあらわにした鋭い声で問いかけてくる「ヒト」。

私に話しかけたのは3人の中央に立つ鮮やかな赤い髪をした少年。

その両脇に一人ずつ男の人が立っている。全員がいつでも迎撃できる、といった風に構えている。

手には見たことも無いような物騒な武器。

その全ての様子に視線をめぐらせてから、始めの彼と視線を合わせる。

確かな意思と感情を思わせる目だ。

そういうモノを、とても久しぶりに見たような気がして私はうっす

らと笑んだ。

唯一、違う色だったから

とりあえず、どうしようか。

こんにちとはとか？この状況でそんなこと言ってられないしなあ。
これはどうなってるの？とか。聞きたい気がする。

しかし・・・

「っ！」

一拍おいて険しい表情で武器を構えなおされてしまう。

うわぁ・・・どうしろと。この状況でどうしろと。

軽く困惑しながらも考える。

なにか・・・したっけ？警戒させるようなことを。

戸惑っているような表情でもしてしまっただろうか。眉間に手をやってみる。

しわ・・・よってないけど。

もともと考えてることとか、感じたことが表情に出ないほうだ。

怒っていても相手に察せられることはないし、楽しいと思っ
ても「つまらない？」とか「やる気無いねえ」とか言われてしま
う。はつきり言って じゃあどんな顔すりゃいいんだよ という
思いで いっぱいだが。

「・・・」

沈黙が続く。 痛い。この沈黙は痛い。

「あの」

とりあえず疑問は解決しなければ。と口を開く。

「これは、どうなっているんですか」

クイ、と人差し指で周囲を指差すと、三者三様の怪訝な表情というか呆気にとられた表情をされた。

「・・・喋った」

赤い髪の人が呟く。

「内容もおかしくはないな」

向かって左の黒髪めがねの人が言う。

「でも反応が・・・おかしくない？」

赤い髪の人が返す。

静かな調子で右側に立っていた男の人が一步こちらに近づいてきた。目線に向けるとにこりと穏やかな表情で微笑んでくれる。

「あなたは・・・格好からしてここの生徒でいいのかな？」

言われた言葉にきょとんとしてしまう。

それ以外に何があるというのだろうか。この場所にこの時間居るとしたら学校の関係者以外ないだろうに。

しかし、彼らはどう見ても私服である。ウチの学校は私服登校は認められていないし、間違っても武器所持が必要なほど危険な場所ではないし・・・でもこの状況で正当性を考えていてもどうしようもない。ああもう。

「そう・・・ですが。何ですか」

考えがまとまらずにイラついた声で答えてしまう。言ってからしまったと後悔。

「どうなってるんですか。これはなんですか。あなたたちは誰です

か。」

急に不安になって言葉を募らせると柔らかい声で言葉が返る。

「とりあえず、ここを出よう。俺も他の二人も決してあなたを傷つけることはしないから」

狂ってる

隣には穏やかな雰囲気をもっている青年、その後ろに赤い髪の私とそう年は変わらないであろう少年と、黒髪の青年が並んで歩いている。

赤い髪の少年は「気分が悪い」とか何とかめっ面ですっとぼやき続けていて、黒髪の青年は基本的に表情が少ない口数も、少ない。対する隣を歩く青年はどこか微笑んでいるように見える表情で、こちらを気遣うような空気をかもし出している。

なんというか・接点のなさそうな3人組だ。クラスに居たらグループが皆ちがうだろうタイプ。

落ち着かない状況で説明というのも難しいだろうと思い、なんとなく話しかけづらい。

何気なく廊下の窓に目をやると、空が灰色に濁っていて空気まで霧がかかったようにあいまいな輪郭をなしていた。

さっきまでものすごい晴れてたのに……。そんなに短時間で天気が変わるだろうか？

不思議に思い目を逸らせないと、隣を歩く青年がその様子に気がついたのか声をかけてくる。

「不思議、ですか？」

的を得た質問にうなづきながら返す。

「……さっきまで晴れてたと思うのに」

「でしょうね。この校舎内だけ空間が隔絶されている」

聞かされた言葉の意味がわからず隣の彼を見やると、色素の薄い瞳を細めてこちらを見返してから窓の方を見つめる。

「この校舎の中に入ったときに違和感を感じませんでしたか？ こう・いつもと違うような」

校舎に入った瞬間の感覚を思い出す。

妙に静かで、人の気配がまったく無かった。どこか置き捨てられた廃屋に迷い込んだかのような感覚。不可思議で奇妙だった。

「でもさあ、あんた何でそんな平然としてんの？ どう考えても異常じゃん。この光景」

赤い髪の少年が理解できない、といった風に声をかけてくる。

後ろを見やり少年の方に顔を向けるとものすごく嫌そうな表情をされてしまう。

なぜか、とても嫌われているような・・・。

「わかりません。普通だったらこんな平常に出来るはずがない、とは思っている」

そこまで言って顔を前に戻す。視界に広がるのはあいも変わらず真っ赤な色とリアルな塊。

それを見てもやはり動かない感情を自分でもおかしいと思う。

それを言葉にするのならこうだろう。

「怖いとか気持ち悪いとかそういうのを全部、自分の中から持ち出されて消されてしまったような感じがするんです」

そうじゃなければ、あたしは狂っている。

幸いと呼ぶには

私のそんな言葉に返ってくるだろう反応は精々いぶかしげな視線ぐらいだろうと思った。

「・・・なるほどね。そういうことか」

ふうん、と軽くなづいてなにやら納得している様子。

なんのことだ？と彼を見つめればそれに気がついた瞬間ふいと顔を背けられてしまう。

・・・こうもあからさまだとあまり怒りも感じない。

想像していた反応と違ったことで多少は安心でもしたのだろうか。少しだけ気が抜けた。

同じく後ろを歩く青年も納得したような様子だし。しばらくその様子を見ていると視線がぶつかってしまう。　気まずさを感じて自然に目を逸らすとそこから声が返る。

「錯乱状態、なんて事でなかったのはこの状況では幸いだったな」

それに首をかしげる。

変わらぬ無表情で言われた言葉に納得できる部分はある。しかし本当にそうだろうかとも思う。確かにこんな状況で暴れまわったところでどうなるものでもない。最善な対応としては一刻も早くここから脱出することだろう。混乱などしている場合ではないのだ。わかっている。

けれども・・・

「そうとも言い切れないでしょう。自分だったらこの状況で平然としていることが怖くなるのでは？」

隣を歩く青年が庇うように助け舟を出してくれている。あまりにわかりやすいフォローだ。

普段なら苦笑の一つでも漏れるところだが、今はどういふことか表情筋が言うことを聞いてくれない。

しかし、そうなんだ。血溜りを歩くことよりも、人一人居ないこの状況よりも、もっとずっと自分の感情の無さが　ただ怖かった。

誰に理解してほしいとも思わない。もちろん、初対面のこの人達にそんな期待はしていない。

要領を得ないまま、奇妙な空間を埋めるためだけに続けていた会話が途切れる。

つい先ほども見たホラーな階段を下って、玄関に佇む下駄箱の列を目に捉えられる場所まで戻ってきた。

ああ、ようやく外に出られる。

無感動にただ事実を確かめるように、そう思った。

ゆらり、と重力が質量を持ったような感覚。

突然の変化を頭で理解する前からだがこれ以上進むな、と警戒を示す。

外へと続く道を1歩踏み出すと同時にそれは起こった。

耳を劈く様な咆哮。何も無いはずの空間に見えるぐにやぐにやとした歪み。

とっさに強い力で腕を引かれる。振り返ろうとすると後ろから伸びてきた腕が腰に回り、抱えるようにして後ろへ飛びのかれる。赤い髪だけが何とか見えて誰かは判断できたがそこまで。

腹部を圧迫する力にうおあ、とかえあ、とか意味の無い声が漏れてしまったがそれを意識する暇ももらえなかった。

突然の光景に目を奪われる。

歪みが大きくなるにつれて咆哮も大きくなってゆく。だんだんと実体を持っていくように見えるそれはまるでヒト、だった。

少年の声が頭のすぐ脇から聞こえる。

「やっぱりクズレか。そんな気はしてたけれどね」

絶えない叫びまでが、私には何故か悲痛な悲鳴のように聞こえた。

理由があつて、意味が伴う

「クズレ・・・？」

私を抱きかかえるようにして引き寄せている少年の発した言葉だ。

ただ呆然とあるいは呆氣にとられたように現れたそれを見つめる。
見つめようなどと思つてはいないのに眼が離せない。

あれは、何だろう。

人、ではないのだろうか。

ぐらぐらと形を定めることの出来ないといった風な輪郭。
それと空気の境が酷くあいまいなのだ。霧のようにうつすらと溶け込んでいるようでもあり、まるでそこから発生した陽炎のようなでもある。とても不安定な形に見える。

「影」

思わず口をついて出た言葉がまさしくそれだ。

影。真っ黒な影。顔を持たず、口を持たず、声を持たず、存在すらない。

後ろにくつついてくる影のようにつぺりとした、人型の黒い形。

視界の端に赤い色が見える。血の色ほど暗くない、鮮やかな少年の髪だと気がついた。

（ああそうか。私は今この人たちと一緒にいるんだ。）

途端、意識がするりと自分の体に戻ってきたような気がした。
その感覚に無意識に疑問が浮かぶ。戻って、きた？

私は今、何を？

「盗られるよ」

強い調子の鋭い声が耳に飛び込んでくる。すばやくそちらに顔を向けるとほんの数cm離れたところに少年の顔がある。

「自分を手放そうとしているやつほど取られ易い。あんたが感情鈍ってんのはわかるけど、ぼけっとしてたらその残った感情ごと持っていかれる」

盗られる？感情を。何を馬鹿なことを、といってしまうえばそこまでのことをすんなりと納得してしまえる自分がいる。

そうなのか。奪われるのか。なんとも非現実的なことだが今考えることはそれが嘘か本当かではない。

黒いそれが一層大きく甲高い声を上げた、と思った瞬間ゆっくりとした動きでふらついていたそれが俊敏な動きで空气中を這ってくるのが見えた。

いや、実際は這うように動き出したのが見えただけだ。

一瞬で床を覆いつくし、足元に広がった真っ暗な闇に気を取られていた私を少年は小さな舌打ちとともに勢いよく後ろへと追いやり、銀色に輝く何かを取り出した。

思わずたたらを踏み、ひざから崩れそうになるのをすんでのところで耐える。

これを見ないままではいけない、目を離してはいけない、と意味も無くそう感じたからだ。

先のがったもの。鋭いもの。硬質な印象の、無機質な・・・

連想ゲームのような思考が追いつかない私のことなどお構いなく、少年は信じられないほど身軽な動きで1歩、2歩と跳躍し力を溜めるように腰を沈め、手に持ったそれで空を裂いた。

そうだ。ナイフだ。そのときになってやっと分析を終えた頭に固有名詞が浮かび上がる。

ナイフなど日常目にするこの無いものだったからイメージつかないのは当然だ。

しかし簡単に名前が出てこなかったのはそれだけが理由ではなかった。

俗に言う不良な感じの人たちが持ち歩くバタフライナイフのような軽さの無い、かといって調理用の包丁のような刃物といった感じの刃物でなく、それがあまりにも使い込まれたといった風だったから。何かを壊すためだけに作られたかのような異質な鋭さを纏っていたから

ナイフという言葉から連想する軽さのような色がどこにも見えなくて予想外。

つまり知識として持ちえていなかったから理解できなかった とい

うことなのだが、そのときの私はそんなことを考える間も無く、より異質な力に魅入られていた。

「一方に支援　時曲の開合　編成　空間を併せ」

少年の跳躍に合わせるようにして黒髪の青年の低い声が響く。

パキリ――と。

暗くにごっていた空が青を取り戻し、普通ならば学校に満ちているだろう生徒たちの声が戻ってきた。

そう思った瞬間にその空間自体が圧縮されて丸く閉じ込められていく。いつの間に移動したのか　着地した少年のすぐ横に茶色い髪の青年が両手を前に突き出して立っていて何かを小さく呟いたかと思うと球状のそれが弾けてあとを残さず消えていってしまった。

フィルムのように次々と変わっていく光景が収まり、数秒間の変化など嘘だったといわんばかりに変わらず濁った暗い色で校内を満たしていた。

何が起こっているんだろう、とか　こんなことありえるはずが無いとか懷疑主義の自分なら絶対に思うはずのこと。でもどうしてだろうか？

（これだ。これに違いない。）

何かを見つけたような確信がずっとしりと心臓を満たしていくばかりでそんなこと、考えも及ばなかったのだ。

知らないからこそ進むのだ

こういうものが異質と呼ばれるのだろうか。異なるというだけなら無数に数ある全てが異質だろうに。

もしかしてそれは 単なる苦し紛れの産物なのではないか。と思っただけけど、どうだろう。

少年が腰に下げたホルダーに厳ついナイフを納めるのをゆるりと見遣りながらぐるぐると動きの悪い脳を働かせる。どうにも現実感の無い光景が消え、しんとした静けさが戻っている。その空気を破るかのように少年が姿勢を崩し、カツリとやけに響く靴音を鳴らした。

「手ごたえ皆無なんだけど。成さあ・・・ちゃんと処理した？」
勢いよくため息をついてぐりん、と黒髪の青年に顔を向ける。その幼さを残す顔を盛大にしかけている。

対する黒髪の青年は目を細めて一点を睨んでおり、その視線はまるでそこに何かが存るかのように鋭い。

「・・・いや、戻せなかった」

「あんた何やってんの？」

交わしている言葉数は少ないのに漂う雰囲気の剣呑さといったら無い。この人たちは、仲が悪いのかも知れない。

実は敵同士なんで、今から果し合いしますね！とか言われてもまったく違和感がないこの状況。

「ああ。次は俺が仕留める。迷惑をかけるつもりは無い」

ぶっきらぼうに目もあわせずに言っただけの言葉の内容が一体良いものなのかどうか判断するほどの知識が無いのでとりあえず黙っておくにかぎる。それにしても

「怪我、なかった？」

急に、いつそ場違いなほど穏やかな声が聞こえてぱちり、と目を瞬かせてしまった。

声の方向に顔を向ければ、先ほどのような間にか瞬間移動(?)をしていた青年が笑みを浮かべている。どうも先ほどまでのやり取りと状況からしてあの陰悪な2人の仲裁役的なポジションに思えてならない。それほど的外れな見解でもないだろう。

「大丈夫、です。」

意識せず足元に下げた視線を横に流す。

「・・・どうかした？」

その行動を不審に思ったのかワンテンポはずして問いかけてくる。

「気分が悪いんですけど、外出ても大丈夫ですか」

意識的に顔を歪めてつぶやいた言葉に青年は気遣うように眉を寄せる。

「ああごめんね。気がつけなくて。もう問題ないから外で少し休も

うか。」

そう言ってちらりと目線を正面の2人に送ってから先導するように斜め前を歩き始める。

それに習うようにして一步踏み出して、違和感。体に絡みつくな、粘着質な視線の気配。 武術なんて嗜んでない私でもわかるこの妙な空気。

周囲を見渡しても先に行く彼以外の2人しかこの場にはいない。そのどちらかがそっぽを向いて相も変わらず無言でいるのに、視線がある。

ぞくり、と

後頭部を貫くような「何か」に感覚を一瞬奪われ、振り切るようにして振り向く。

何も無い。当たり前だ。はじめからそこには何も無かった。2階へと続くスプラッタな階段が鎮座しているだけ。何かに騙されたような心地で警戒を解くと別の方向から視線を感じる。それを辿れば、静かな色を湛える瞳と視線が交わった。レンズ越しでもわかるほど鋭く、冷たい目。それを見つめ返して理解する。

やっぱり何も無いわけじゃ、無かったみたいだ。ただ全てを知るには早すぎて、今はその視線の意味を読み解く術が無い。

見えない「何か」が「何処か」でさも可笑しそうに笑っているよう
な気がした。

始まりを知った

自分ではどうしようもない状況に陥って、誰か助けて！といつも「誰か」を呼ぶけれど

その「誰か」が来てくれた例など無い。なにかとんでもなく恐ろしいものに飲み込まれそうで怖くて仕方なかったとしても助けに答える手など差し伸べられぬのだから期待は捨て、考えるのだ。

ほら、状況を動かせるのは自分だけなのだと。1秒でも早く気がつくことだ。

この体を持ち上げるため この体を前に進めるため この手と足があるのだと。

久しぶりに見上げたような気がする空は風も無いのに奇妙なほど早く雲が流れていた。灰色に濁り細長い雲がところどころ模様のように彩るさまは

正に世界の終わりの日とも言えそうなほど不気味な様相。

それでもやはりお化け屋敷も真っ青なほどのキチガイ環境と化していた校内にいるよりは幾分気も晴れるというものだ。

こちらを振り返り、私の歩くペースを気にしてくれているらしい青年に追いつくため、足早に下駄箱の列を抜ける。

一時の形の無い視線のことなど頭から離れていた。

「クズレと呼びます。元は人だった・・・というのが俺達の認識ですが、実際にそれを証明する手立ては今のところ見つかっていませんし見つけたら倒せ、が基本となっています」

落ち着いた場所に出て 何か聞きたいことがあれば何でも答えます、と微笑んで見せた青年に何よりまず先に先ほどのあれは何なのか、と聞いた

答えがこれだ。

校舎から駐車スペースを抜け、体育館の周りを沿うようにして歩くとグラウンドに出る。出来るだけ視界の開けた場所へ行こうと促され、じゃあグラウンドに・・・とやってきたのだ。400mトラックに棒高跳びや走り幅跳びの練習スペース、加えてテニスコートが8面と室外バスケットもあるなかに設備が整った運動場が学校側の自慢だったりする。

前方に国旗やら校旗を昇らせるポールが立っており、一段高く作られている。そこに腰掛けて先ほどの状況を説明してもらっているところだ。

段差に座り込んでしばらくしてやって来た2人はそれぞれ足をぶらつかせたり胡坐を組んだりと勝手な姿勢でばらばらな位置に座り込んでいる。

もう、この2人は絶対説明する気ないな・・・

「いつてしまえば自分たちにとってもクズレは未知な存在なんです。説明しようにも、そもそも知識が無い。あなたはこの状況自体が可笑しいとは感じませんでしたか？」

青年が言葉を続ける。問いかけられた内容を頭の中で繰り返し、同時にここまでの経緯も思い浮かべてみた。

人の消えた校舎。丸つきりホラーな風景。自分がなんとなく感じる違和感も全部、異常だと言い切れる。

「校舎入る瞬間から全部おかしかった・・・と思います。しかもこれ、」

人差し指で空を指差す。

「登校中は晴れてたのに」

淡々と言葉を並べる。場違いなほど冷静な言葉に違和感を覚えて首を傾げてみた。ふと頭をよぎるのは昔見た映画だったか本だったかに出てくる感情をなくした暗殺者だ。

一般人の自分に当てはめようと思った事が妙に可笑しい。だけど、笑えない。

「そう。この校舎周辺と外が完全に切り離されている。あなたが登

校してきた道が外。この校舎内へ入った瞬間に周囲も空間に飲まれてしまった。

なぜならば標的を変わらず捉えるために、です」

いきなりで理解しがたいとは思いますが・・・といって青年は苦笑してみせる。

ようするに、標的というのが私なのだそうだ。・・・なんだろうこの展開は。

話を要約するとつまりはこういうことらしい。

学校周辺はついさっき、つまりあたしが校舎内へ入るまで外と繋がっていた。でも「標的」である自分を逃すまいとその空間を檻として広げ、完全に閉じ込めてしまったと。一体自分は何に狙われてたというのだ、と聞けばそれが一番解決したい問題なのだと苦い笑みを返されてしまった。とりあえずあの影のようなもの、「クズレ」が親玉というわけではないらしい。ボスを倒せば全部解決、というゲームのような設定は無いのだと。

ならば、と疑問に思う。それは更に絶望的なんじゃないか。目的がわからない、原因がわからないとなれば一体何を持って解決と出来るのか。

疑問をそのまま伝えると青年は驚いたような、感心したような表情を浮かべ 次いで先ほどまでの笑みとはどこか違う、いたずらじみた笑みを浮かべた。

「だから、あなたを探していた」

あなたがその「目的」で、言葉にするなら「解決」なのだ、と。するりと細められた目に射抜かれる。この状況を楽しむようなその

声色。

ああ、やっぱりこの人もこいつらの仲間なんだな。

印象をぐるりと一回転させるほどに一瞬で変えて見せた彼に諦めの
ような気持ちでそう、思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2912e/>

切り替わる一日に

2011年10月4日22時11分発行